
Start Line

椎名蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Start Line

【Nコード】

N9477D

【作者名】

椎名蓮

【あらすじ】

かつて100点ゲームを成し遂げたスリーポイントシューターが存在した。そして舞台はミニバスケットボールの世界から、中学バスケット界へと移る。名を馳せたシューター、越後はるはバスケの名門校羽ヶ丘学園に入学したのにも関わらず、入部する気はまったくのゼロ！？個性豊かな仲間たちと繰り広げる青春バスケットリー。

GAME 00・Who is he?

春。

羽ヶ丘市内にある桜は満開に咲き誇り始めていた3月の末。

3月最後の週末を人々はそれぞれ思い思いに過ごしていることだろう。

家族と買い物に行ったり、恋人とデートを楽しんだり、友達とつるんでどこかに出かけたり。

使い方は人それぞれだろうが、皆国民の休日を楽しんでいた。

こんな場所にも休日を謳歌する若者がいる。

最近建設が終了したばかりの都市のニュータウン内に作られた広場。そこに地域に住む中高生の要望でバスケットボールのゴールが設置された。

休日になると近所の中学生らが集まって、ここで日が暮れるまでゲームをするのがこの公園の風景になっている。

今日も仲の良いグループが3人ずつに分かれて、ゲームを楽しんでいる。

特に得点板があるわけでもないが、皆思い思いに動いている。

今日は少しばかり人数が多かったのか、ベンチの方で2、3人の青年たちが飲みものを飲み、タオルで汗を拭きながらゲームを見物しているようだった。

「そついやさ、俺此間凄い話聞いたんだ」

話を切り出したのはベンチの真ん中に座っていた小柄な青年。

「なんだよ？ 凄い話って？」

「去年の秋の大会で100点ゲームをした小学生がいたらしいんだよ」

100点ゲームという言葉聞いて、右隣りに座っていた青年が飲んでいたスポーツドリンクを噴出し、むせてしまった。げぼげぼと隣りで咳き込む。

「おいおい、マジかよ」

「でもよ、それって小学生の大会だろ？ありえるのかよ」

100点ゲーム。彼ら中学生でもなかなか起こらないことだ。どちらかのチームが一方的に負けるでもない限りそう滅多に起こることのないことだ。

「本当だつて。そのうえスリーポイントの連続らしくて、そのチームが優勝したらしい」

青年たちは「本当に小学生かよ」などと吐き捨てて、持っていたタオルでばたばたと仰いだ。

「ま、その凄いシューターはもう卒業したみたいだけだよ」

「つてことはそいつも今度中学生つてことかよ」

「うわ！俺当たりたくねえ…！」

ミニバスケットボールの世界で頂点に立ったシューターが今度は中学バスケット界に潜り込んでくる。本音を言えば当たりたくないところだ。

ゴールの方から交代の合図が掛かり、1番小柄な少年がスポーツドリンクの入ったボトルをベンチに置いて立ち上がった。

「でもよ、さっきの奴ひょっとしたらあそこに来るかもな」

羽ヶ丘市、そしてバスケットと言ったらあの名を知らないものはいない。

「羽ヶ丘学園に」

バスケの名門校、羽ヶ丘学園。
たださえこの地域でも一目置かれてるあの学園に彼が入ったとしたらきつと、

「うわ！ヤベ！」

ゲームをしていた青年たちが使っていたボールが思ったよりも遠くに飛び、そのボールはベンチに座っている彼らの頭も超えていった。ボールが落ちた先は、公園の前を通りかかった小柄な少年の頭のうえ。

少年が被っていたフードがずれ、後頭部に大激突。そのまま少年はその場に倒れた。幸い酷い様子もなく、青年たちが駆け寄る前にはむくりと起き上がっていた。

「悪い！坊主！手が滑ってな」

「別に」

思った反応よりも薄い反応を返されたので、青年たちは拍子抜けした。てっきり大泣きぐらいはされるものだと思っていた。小学生の割には、落ち着いているというより愛想がなく、無表情に近いものがあつた。少年は落ちていたボールを拾った。気のせいだったか、少年が一瞬にやりと笑ったような気がした。

「オニイサンたちバスケやってたんだ」

「ああ、まあな」

「ねえ、俺とやってくんない？」

その時は軽い気持ちで乗った彼らだったが、その数十分後無残にも敗退することになるとは思わなかっただろう。

彼が、あのスリーポイントシューターでなければ勝てたのだろうか。

G A M E O O ・ W h o i s h e ? (後書き)

青春バスケットリーの幕開けです。

マイペースな主人公ですが、どうぞ見守ってあげてください。

どこの入学式でも変わらないものがひとつ。

校長、またはそれに順ずるもののありがたくもなんともしない長い話。

「ふああ…」

たださえ目立つ金髪で教師らから目をつけられているというのに、最前席で大あくびをする勇者あり。その名は越後はる。身長こそ人よりも小さいが態度は見ての通り。担任教師が睨みをきかせているのにも関わらず、ついには頭がこくりこくりと揺れて、そのまま夢の世界へダイブしてしまったようだ。

「まったくもう！たださえアンタは目立つんだからしゃきつとしないさいよ！」

「別にいいじゃん」

入学式が終了するなり、玄関先で待ち構えていたはるの母琴音ははるの頬を思いっきりつねった。当の本人はるは反省する様子もなく、面倒臭いと顔に書いてある。口元を手で覆ってまた大あくび。

「でもさ、」

「なによ」

「俺より母さんの方が目立ってると思うけど」

母、琴音の格好と言ったら濃いピンク色の着物姿。日頃の肌の手入れがいいのか、確かに他の母親と比べれば少しは若く見える。だがこれでははるではなく母親の成人式のようだ。琴音の派手好きは今に始まったものではないがため息つきたくなる息子の気持ちは察してほしいものだ。

「だって、折角お父さんが選んでくれたんだから着なきゃ悪いでしょ。もう、お父さんったら。私がピンク好きだからって…きゃ！」

頬を染めて両手の胸元で祈るように手を組んで、くるりと回る姿はまるで恋する女子高生。母と父が仲がいいのは何も言わないが、限度は考えて欲しいところである。

「どうでもいいけど。母さんたち、この後PTAの集まりかなんかあるんじゃないの？」

「やだ！いけない！なんで教室出る前に言わないのよ！」

「忘れてる方が悪い」

「ああもう！あ、はる、鍵渡しておくから先帰ってご飯食べちゃって！」

嵐の如く教室に走っていく母。慣れない着物なんて着たら、1度は転ぶのではないかと頭の片隅で考えていたはるだが、大して心配もせず、制服のポケットに手をつ込んだまま、校門の方ではなくグラウンドへと歩き出した。突っ込んだポケットに琴音から受け取った家を鍵も一緒に仕舞いこんで。

「校庭広…でも誰もいないや」

校庭は桜が満開に咲き誇っていて、グラウンドには桃色の花びらが模様を作っていて、まるで絨毯のようだった。だが、そこに人の姿はまったくないようだ。今日は入学式、他の在校生もさっさと帰ってしまったのか。

つまらないなあと思いながらも向かったのはバスケットのゴール。

「ふーん…鹿島よりも結構設備いいんだ」

テニスコートのすぐ近くにバスケットのゴールが2つ対極に置かれている。おそらく外練習の際はここを使って練習するのだろう。朝練はあったのか、ゴールの真下に1つだけバスケットボールが転がっていた。

はるはゴールの真下まで歩くと転がっていたボールを拾う。砂がついてやや汚れているものの、空気はちゃんと入ってるようだ。はるはそのボールをポンと投げ、落ちてくるボールを右手の人差し指で受け止め、1本の指のうえでくると回した。指の上で回しながら、歩き、ある地点で指のうえで回していたボールを地面に落とし、跳ね返って来たボールを両手で掴んだ。

彼が立ち止まったのはゴール真ん前のスリーポイントライン。

「……」

ボールを構え、腰を落とし、左足をやや後ろに下げた。その姿勢のまま、しばらく静止した。

そして、手を伸ばし——跳んだ。

手から離れたボールは緩い弧を描いて宙を飛んでいき、そしてボールは音を立てずに、ずっとゴールのネットの中に入っていた。入っていったというよりも、吸い込まれた、もしくは元に戻っていたように。そしてボールは地面に落ち、バウンドする。

「お、ナイスショットじゃん！」

はる以外に人はいなかったはずだった。いきなり声が出たかと思うと、空から人が降ってきた——正しくは飛び降りてきたのだが。その人物が降りてきたのは2階。ちょうど彼がコートの上に着したとき、上の教室のベランダから担任だと思われる中年の男が顔を出してくるなり「相模！！」と大声で怒鳴った。

降りてきたのは2年生の男子生徒。茶髪のやや長めの髪に、耳にはヘッドホン。学ランは教室に脱いできたようで、長袖のシャツのしたにはオレンジ色のTシャツが見えた。昼食の途中だったのか、手には近くのコンビ二の袋のなかに大量のパンが詰めこめられている。

はるはいきなりやってきたこの男に特に関心がないようで、そのままコートをあとにしようとしていた。

「スーパースリーポイントシューター、越後はるってお前だろ？」
名前を呼ばれ、はるは振り返り、どうして知っているんだと言いたそうな目を向けた。

「吉崎部長から凄い奴が来るって聞いてたけど小さいなあ前。道理で相手が油断するわけだ」

「何が言いたいんすか」

「来るんだろ、バスケ部？」

まだ名乗ってもいないというのに彼、相模は来ることを確信しているようで「来たら1対1やろうぜ」と馴れ馴れしく話し出す。此処、羽ヶ丘学園はバスケの名門校。あれだけ名を残したシューターだ。そう言われても仕方がないことだろう。

だが、

返ってきたのは予想外の答え。

「バスケ部、入る気ないけど」

GAME 01・He is genius basket ball play

はるとお母さんとお父さんは新婚夫婦なみに仲がいいです。
おそらく喧嘩したことがないかと思われます。

GAME2・shall we play basket ball? - 1 -

『You haven't right to play basket ball with teammate』

今でも忘れることの出来ない言葉があった。
それを思い出すたびに、苦々しいものも溢れ出そうになった。

翌日のとある2年生の教室にて。

単細胞も持ち主、相模亮は目の前に大量の購買のパンがあるのにも関わらず、その顔は不機嫌だった。眉間に皺を寄せ、眉を吊り上げ、友人らが呆れるぐらいの速さでパンを食べていく。その光景に周囲は言葉を失った。

痺れを切らして言葉を書けたのはクラスメイト兼部活仲間でもある羽前千尋。
うぜんちひろ

「ちつとは静かに喰えよ、相模。シャツにクリーム付いてるぜ」
「ぶなのひつはほほは！」

口の中にパンを含んでいるので、相模の言葉がもはや解読不能。
羽前が隣りにいた優等生、岩代宏貴に翻訳を求める。
いわしろひろき

「岩代、解読頼む」

「多分『んなこと知ったことか』って言ってるんだと思うよ」

「はあ。原因は『越後はる』か」

相模は口の中のパンを飲み込み、やつのことと言葉を吐く。もうそこがとにかく話したかったのか、口元に付いているパンの残骸にも気にせずに。

「そうなんだよ！越後！あいつなんだよ！」

ちょうど相模が越後と話していたとき、ベランダから岩代と羽前もその様子を伺っていた。フリーフローを打った瞬間を2人は目の辺りにした。スリースローはたとえ沢山練習を積んだ選手でも100発中100回入るとは限らない。しかも、バスケの選手にとって重要な『身長』を欠いた状態で。

ただ者ではない。岩代たちもそんな予感ほ薄々感じてはいた。

「確かに越後くんの実力は俺も凄いと思ったけどね」

「だろ！岩代もそう思うだろ！」

「でも本人がやらないって言った以上バスケ部には来ないんじゃないのか？」

あの様子から見ても彼が素直に入部してくることは望めなさそうだ。

だが、だとしたらひとつ疑問が残る。

「だったらなんでここに来たんだよ？」

相模の問いに、岩代も羽前も沈黙した。

羽ヶ丘学園はバスケの名門校として知られ、普通に入学するにも試験がある。とてもじゃないが、気紛れで入学するのは難しい。

「さあね。俺たちみたいにバスケットをやるために来たっていうわけじゃないからスポーツ推薦で来たわけでもないようだし」

「やっぱ気紛れじゃねえのか？」

あんぱんを口に加えながら、机に腰を掛けていた相模は急に何かを思い立ったように机のうえからおりて、駆け出した。

「おい相模！どこ行くんだよ！」

「決まってるだろ！1の7！越後はるんとこだ！」

GAME 2・shall we play basket ball? - 1 -

バスケット部の嵐、相模亮大暴走寸前です。

この3人は小学校時代からのマブダチトリオです。

だいたい相模が暴走して、残り2人は止め役兼お世話係。

一方、相模の向かう1の7の教室では目が覚めきっていない、ぼんやりとした表情を浮かべるはるがようやく鞆から今日の昼食を取り出したところだった。午前中の授業をほとんど寝て過ごしたはる。おかげさまで入学式前日にわざわざ買ってきたノートには何も書きこまれていない。時折みみずの張ったような線がちらほら見えるだけだ。

はるはあんぱんの袋を開け、一口。相変わらず目はとろんとしていて、食べているそばからまた寝てしまいそうな気さえする。

「あの…越後くん、ちょっといいかな」
「ん」

声を掛けてきたのは同じクラスの女子生徒。明るい茶髪の髪を2つに結っている、大人しそうな女の子だ。確かこの人は…

「五十嵐^{いがらし}」
「五十嵐」

五十嵐音。確かクラス委員をしている女子だ。大人しそうな外見とは裏腹に、結構根は真面目で責任感が強い。それでも危なっかしいイメージは拭い取れそうもないが。

「で、何？」

「あ、うん…社会のプリントを集めたいんだけど、越後くん書いた？」

「……書いてない」

当たり前だ。授業中何もせずに熟睡していたのだから。机の中に入っていたが、何を書いていいのかまったくもって分からない。

「そっか。これ放課後までに出せばいいって先生言ってたから」
「そ。教えてくれてどーも」

そうは言われたものの、おそらくはやるはらないだろうが。それは、五十嵐が教室を出て行ってからすぐのことだ。

すさまじい足音が聞こえてきたのは。

「越後はる！！」

振り向けば、そこには入学式当日に会った、あの2年の男子生徒の姿が。

確か名前は相模と呼ばれていたつけ、とぼんやりと思い出した。クラスじゅうがはると、そして相模の方へ視線を集中させる。どうやら傍観者でいることは無理なようだと言ひ、相模の前までやってきた。

「何か用？」

「俺は納得いかねえ！なんであれだけの実力があってバスケット部に来ないんだよ！」

「まさかそんなこと言うために来たんスか」

大真面目に「あたりめーだ！」と答える相模の返事を聞くなり、はる及び外野の羽前と岩代もため息をつく。

「入るも入らないも俺の自由っしょ？あんたに関係ないじゃん」

「俺が納得できねーんだよ！」

「そんなの知らないよ」

はるは付き合ってられないといった表情を浮かべ、相模に背中を向けて、席へ戻ろうとした。

あのことを言われなければ。

「お前鹿島ウィングズのキャプテンだったんだろ！？だったらどうしてバスケ辞めたんだよ！どうしてここに来たんだよ！」

はるは背中越しで、相模の言葉を聞いた。

昔の残像を思い出しながら。

I Haru, you haven't right to play basketball with team mate...

「さあ、ね」

いきなり静かになったかと思うと後ろから、バシッという音が聞こえた。振り返るとそこには『決糖条』と書かれた紙が。おそらく『決闘状』と書きたかったのだらうが。

「なに、これ」

「越後はる、お前に^{マンツーマン}対一の勝負を挑む！俺が勝つたらバスケット部に
入れ！」

GAME 03・shall we play basketball? - 2 -

英語の翻訳は単純なので辞書引いて訳してみてください。英語なのは理由がちゃんとあります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9477d/>

Start Line

2010年10月28日04時33分発行